

# 時代閉塞の現状

——砂粒化・グローバル化・二極化——

先崎 彰容

日本大学の先崎です。僅か二〇分の発表ではあるのですが、一〇〇年前ぐらい前の話まで行ってそしてまた現代に帰ってくるといふ忙しい話になるかと思えます。

今日のタイトルですが「時代閉塞の現状」と付けました。これは今から一〇〇年ほど前、一九一〇年ですね、明治四三年に石川啄木自身が書いたあるエッセイのタイトルをそのまま持ってきたものです。だからといって一〇〇年前にすぐ行くわけではなくて、少し準備運動をしていきたいんですが、そもそも今のドーク先生のお話も非常に刺激的で、後で自分の発言と一緒に合わせてコメントしていきたいと思っています。

ところで、令和という新しい年号に入って一ヶ月程が経つのですが、この平成の終わりの時期にかけていくつか教育改革がなされ、道德教育が教科化された。貴校は正にそれに関わって

いる場所ということを意識しまして、それに関わる発言から始めていきたいと思えます。先ほど川久保先生から宣伝して頂いた、今週書店に並んでいる拙著『バッシング論』（新潮新書）の中で、私も教育問題について少し触れました。それから先週大阪の方で講演させて頂いた時も、教育問題について少しお話しさせて頂いたんです。皆さん覚えておられると思うんですけども、安倍内閣が第四次、最新の内閣を組閣した時に柴山さんという文部科学大臣が新しく登場してきましたけれども、その人が着任会見だったでしょうか、そこで早々に教育勅語をめぐる発言をして、撤回するということがありました。私はすぐに教育勅語がいいのか悪いのかとか、講演会に行ったりすると聞かれたり、あるいは、いいと言わないとまずいような雰囲気気に落とし込まれたりするんですが、そういうことが私が言い

たいことではありません。この国において国の骨格になる道徳が必要だという風に言った時に、それをすぐに撤回したり報道して叩いて撤回させたり、いずれにしてもそういうことを大人たちがやってるということ自体、それ自体が非常に浅はかであろうと考えるのです。

なぜなら国が教育というのを考える時の価値観、基本というのは、道徳というのとは本来いい加減に他人任せに出来ないものだからこそ学校で教えるものであって、政治的なことによつて出したり入れたりすることが出来ないものが道徳だろうというのが私の基本的な立場なんです。

そういう風に考える時にまずもつてやりたいことが今日の発表でありまして、そもそもどうして政治家の口からそういう言葉が出てくるんだろうか、そこには果たしてどういう社会的な背景があるんだろうか、ここをまず冷静に見てみないといけないうらうという風に考えたんです。

まず第一に、ここ二、三〇年の日本がどうなっているのか、ということの一つの参考になる本があるのでそれを引用してみましよう。二〇一〇年に出された宇野重規さんという東京大学で政治学を教えてらっしゃる先生ですけども、この人はトクヴィルの研究者です。トクヴィルという人は、アメリカのデモクラシーについての名著を作った人であり、マルクスとほぼ同じ時代の人なんです。これが面白いなと思ったんです。なぜな

ら、トクヴィルとマルクスが同じ時代に生きていたにも関わらず、人間に対する見方がおそらく正反対だったんです。マルクスというのは、「人間とは何か」と聞かれたら、「階級だ」と答えるわけですね。それぞれ所属する階級があって、例えばブルジョアジーであるとかプロレタリア。それに対してトクヴィルがアメリカの社会で見たのは何かというと、「人間とは何か」と言ったら「バラバラだ」と見たわけですね。これからの時代は階級というものに所属しているというよりも、あらゆる所属を剥奪されてしまったバラバラな個人こそが注目すべき問題なんだと。こういう風に言ったのがトクヴィルだと思うんです。

そう思った上でここにある二つの資料を読ませて頂きますと、トクヴィルの言う平等化とは独特な概念である。なぜ独特かと言うと、平等というのは我々はいいものだと教わっているんですね。ところがトクヴィルにおいてはそうではないんです。それまで人々を隔てていた想像力の壁が壊れ、そのことによつて改めて人々の間の平等、不平等をめぐり意識が覚醒することが平等化であったと。「平等、不平等をめぐり意識が覚醒する」、これがマイナスのイメージなんだよっていうことを掴んで頂きたい。例えばこういうことなんです。壁がある間というのは、向こう側が分かりません。向こう側にどんな人がいるか分からないんです。

ところが、平等になるといえるのは、壁を取っ払って全員が

「自分たちが同じ人間だ」とかこういう風に考えるんです。そうすると壁があるときは、例えば僕がイチローとか別世界の野球選手であつて嫉妬もしないんですけれども、これが同列の人間だと言われた瞬間に、自分より急にお金持ちの人を嫉妬してみたりだとか、自分もイチローになれるんじゃないかとか考えて、実は苦しみを生み出すんですね。必ずしも平等ということは、心を安心させない訳です。トクヴィルはそういうことを指摘していて、相手と自分が同じでなければならぬということが、心をかき乱すという悪い点がある、平等化には問題があるんだよつてことを示しているんです。それをもう一つ示したのが次のような引用でありまして、「このように不平等意識が高まり、一人一人の個人の不安感は募るばかりである。しかしながら不平等と向き合い対応していくために連帯すべき他者を見出すことは容易ではありません。現代における不平等を自分一人で受け止めていくしかないのか」という風に書いてあるんです。

ここで先ほどのドーク先生の言葉にもあつた「連帯」という言葉が出てきます。そして一番最後は「自分一人で受け止めていくしかないのか」という風になっている訳です。つまり私たちの社会というのは、過剰に平等を追求し、そして自分というものを他者と比較することによって、実は新しい連帯の仕方を見失つて、一人一人が自分の問題は自分で処理しなきゃいけない

なくなつてきたと、こういう社会になつたんです。

以上からもう既に個人主義的バラバラであるということが問題だと分かるんですが、これによって具体的にどんな問題が生じるかというところ、例えばこんな問題が生じる。自分一人で自分の身を処さなきゃいけない。老後はどうやら二〇〇〇万円が必要だと言われてしまう。社会的な基盤が揺らいで、自分でどうにかしてくれと言われてる。そうすると人間というのは、自分個人の不安を自分で解消するためには短い解決方法を求めるんですね。短期的な政策。それが政治に反映されると短い政策、わかり易い政策がどんどん通つて行くようになって、私に投票してくれたらこれだけ儲かるとか。なかなか実際うまく行かないことに飛びつく。非常に社会が不安定化していくんです。情報に一喜一憂するところということが、自分一人で受け止めていくしかない我々の社会の問題点だと思います。

それに対して宇野さんがどういう解決方法を言ってるかは、時間があれば後ほどの議論で言いたいと思います。ここで次に少し一〇〇年前のところに飛んでいきます。石川啄木という人を取り上げたのは、実はこの一九一〇年代、明治四三年というのは本当に象徴的な年で、例えば大逆事件が起きるといったことがあつた。同時に例えば柳田国男が『遠野物語』を書いたりとか、それから西田幾多郎が『善の研究』を書いたのも、ほぼこの時代。夏目漱石の『門』という小説が出たりもします。非常

に文学的・思想的に豊富な、多産な年なんです。石川啄木もこれから見ていく文章を書いた人です。

この時代に私が注目した理由を一言で言うならば、日本において最初にグローバル化に飲み込まれた時期だったんです。帝國主義化と言った方がより正確なんですけど、グローバル化に飲み込まれた。そこで日本という国がどんな状況になったのか。明治時代のことをよく「富国強兵」という風に言うわけです。これは皆さん知っている中学校の教科書でならっていません。日露戦争に勝つと、一般的にはこう言われる。国家目標として日本が植民地化されるというのを脱するというのが明治三〇年代後半で四〇年代に入っていく。その結果どうなるかというのと、「富国強兵」という文字を見てください。このうちの、まず、兵隊さんをどうしても強くしなきゃいけないという目標は日露戦争で達成されたんですね。強兵という言葉にバツテン印がつく。興味関心から失われて来るんですね。そして二つ目が、石川啄木を読むと司馬遼太郎と歴史観が違うとはつきり分かるんですが、日露戦争が終わった後というのは、簡単に言いますと国が植民地化されないように一生懸命緊張していたのが一瞬緊張が途切れるような状態なんです。大学の学生さんには分かりやすくする為にこんな例を使ったりするんですが、金メダルを取らなければいけないと思ってもものすごい集中して集中して集中して頑張ってきた人が本当に金メダルを取っちゃ

と、一種の燃え尽き症候群になりますね。次の目標を何にしていいかわからない。これと同じような状況に陥るのが日露戦争後だつて言われるんです。

そうすると何が消えるかと言うと、国というものに対する興味関心が無くなってくるんですよ。そうすると「富国強兵」から、「国」と「強兵」にバツテン印をつけると、「富」しか残らなくなるんですね。これが実は現代社会の、特に若者の間でグローバル化というのが一種のIT長者とか言われる企業者を生み出す傾向があるのと似たような傾向を石川啄木が喋ってるなと思つて持ってきた文章なんです。

それを読む前に一つだけ冗談みたいなものを付け加えておくと、去年でしたでしょうか、少し騒がれたのが東京大学の入試において法学部よりも、合格最低点で経済学部が上回ったというのでちょっと騒がれたんですね。これは何を意味してるかというのと、東大というのはわかり易く言えば国の官僚さんを養成するところというイメージがあるんです。その官僚とか国に関わるのところよりも、経済で起業したりとかする方に若者が魅力をいよいよ感じ始めた象徴だと、こういう風に読まないで、ただの面白可笑しいニュースになってしまう。それを踏まえた上で、この石川啄木の一〇〇年前の文章を読んでみなきゃいけないんですね。ちょっと読んでみます。

「国家は強大でなければならぬ。我々は（我々はこの

若者のことなんです）それを阻害すべき何等の理由も持っていない。そうしてこの結論は特に実業界を志す一部の青年の間にはさらに一層明晰になっている。曰く、国家は帝国主義をもって日増しに強大になっている。誠に結構なことだ。だから我々もよろしくその真似をしなければならぬ。正義だの人道だのということはお構いなしに一生懸命儲けなければならぬ。国の為なんて考えている暇などあるものか」とこうなるわけです。これはたつた四行の文章ですがおかしいと思いませんか？一行目で国家は強くなければいけないと言っているのに最後は国家なんてどうでもいいと言っているんです。ここに隠されている秘密は何かというと、実は二行目三行目、特に三行目は、「国家は帝国主義」と書いてある。つまりこの場合の国家理解は、「グローバル化している」ということを示しているんです。これは私の考えと明らかに反対なんです。私は拙著『ナショナリズムの復権』（ちくま新書）とかで書いているのは、国家とは拡張しない。拡大しないことこそ国家だと。固有の歴史とは拡張できないものですよね。さらにその一行目上の二行目を見てください。実業界と書いてあるんです。これは正に現代社会において実業界の若い青年達とかというのは国境を越えて日本なんてどうでもいいんです。もし国に興味関心があるのだとしたら、グローバルな俺を支援してくれる時だけ興味があるんですよね。そしてまさに現在の安倍政権のやっていることもそ

ういうことなんだと思います。

さてそうした場合に、実業界の一部の成功した人間の他に石川啄木が詩なんか書いていた。一方で目標を見失って国との繋がりがも感じられない、実業界で成功してるわけでもない、そういう多数の若者が登場してきて次のような精神状態になっているという風に言ったんです。「かくて今や我々には自己主張の強烈な要求だけが残っているんだ。」自然主義というのは文学の話なので少し飛ばしますが、「自然主義発生当時と同じく今なお理想を失い、方向を失い、出口を失った状態において長い間鬱積してきたその自分の力を持て余してるんだ」とこういう風に言っているわけです。

つまりグローバルなものに乗っかって成功できない若い人達、そしてこれが二極化と呼ばれることの、こぼれ落ちていく若者たちですけれども、そうした彼らの心を襲っているのが強烈な自己主張の欲求はあるんだけど何か面白いことを見つけれなくて、ある種の目標喪失に陥った状態なんだ。こういうのが明治末期の姿なんだよってことを言ってくれているということが分かります。

細かいことは時間が迫りますのであまり申し上げませんが、石川啄木の話というのは先ほどの宇野重規さんの話と大いに重なって、現代社会においても示唆が大きいように思うんです。

以上のことから言えるのは何かと言いますと、グローバル化

した社会の中で、特に私は教職の関係ですから若者たちに興味持ってるんですけども、彼らがやはり国家というもの、あるいは公共性に興味を持ってなくなつて出口がある種失っている状態はやはりあるんじゃないかという風に思っています。その時に少し難しい言葉で言えばそこにあるのはこれまで日本社会を安定させてきた社会的な包摂性、もつとわかりやすい言葉でいうと、中間層ということなんでしょうけど、そういうものがどんどん奪われていっているという状態なんだと思います。

そしておそらくこういった公共性のようなものが欠如していつてるといふのを、分かっているからこそ第四次安倍政権における柴山文科科学大臣は教育において勅語の話をしたりとか、そういうことを言ったんだという風に思います。

そもそも論ですけども、教育勅語というものが明治一〇年代に地方における青少年の過激な政治的な発言に対して不安を感じた、地方長官会議というところからの要請によって作られたということから分かる通り、社会が安定性を欠いていつた中で国がどういふ風に公共性という秩序を作つたらいいかというある種の真剣な悩みから勅語は発せられたわけですし、現代の社会においても道徳の教育の必要性というの求められているんだらうと思います。

先ほど控室でドーク先生とお話ししていた時に、アメリカにおいて教会に行くという実践があるわけですけども、日本に

おいてそういうのを導き出すのは難しい。ドーク先生は、日本はなかなかいいじゃないかと言つてくれてるんですけど、私はこと日本の都心部を見る限りそういう風に断定しきれないぐらいい日本は分裂しているんだと思います。そういうところで差し当たりでいうと意外と日本の教育を支えているのは学校の体育教師とかの野球の監督とかあるいは甲子園とか、あんなところに行つてる人たちが実は支えているんでしょうけれども、一つだけ、せつかくここは麗澤大学の道徳科学研究所なので言つておきたいのは、日本において難しいのは極端な右左の人たちの意見がどうしてもマスコミで取り上げられるように演出されて、結果、教科書というの是非常に微温的なもの、毒にも薬にもならないものになってしまう傾向があるんですね。

私はちよつと道徳の教科書をいろいろ調べた時に、中学生に対して将来の夢を書いてみようとか、そのぐらいのことを書かせることがまことしやかに教科書になってしまつてる傾向がある。これはやはり、左右両極端を切つた結果なんですね。それがなにより大人の思惑としては道徳教育をしてるつもりなんだけど、現場ではなかなか使われていないという現状がある。この現状を知つた上で、僕たちは教育問題、あるいは道徳の問題を学校でどうやって行くのかというのを考えていかなければいけないな、という提案ということまで時間がきましたので終わりにしたいと思います。